

歌劇「後宮からの逃走 K.384」序曲

歌劇「後宮からの逃走」は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）がウィーンで活動を始めて最初に書いたオペラで、1782年に初演された。有名な映画「アマデウス」には、このオペラの舞台がトルコの後宮（ハーレム）だというモーツァルトの発言に皇帝ヨーゼフ2世が驚くシーンがあるが、東方への憧れは当時の流行でもあった。物語は、青年ベルモンテがトルコの後宮に囚われた恋人コンスタンツェを救い出すというもの。序曲ではピッコロ、トライアングル、シンバル、大太鼓などが異国情緒を醸し出す。

ヴァイオリン協奏曲第5番イ長調 K.219「トルコ風」より第3楽章

モーツァルトはわずか13歳で故郷ザルツブルクの宮廷楽団でコンサート・マスターを務めるほどのヴァイオリンの名手だった。1775年はヴァイオリン協奏曲の年といわれ、第2～第5番が作曲されている。《第5番》は「トルコ風」の愛称で呼ばれており、第3楽章のメヌエットの中間部では、トルコの軍楽のように強烈なアクセントをもつ活発な音楽が疾走する。

フルートとハーブのための協奏曲八長調 K.299より第1楽章

モーツァルトは度重なる演奏旅行を通して、つねにヨーロッパの新しい音楽に触れることができた。1777年秋から1年4ヶ月にわたるマンハイムとパリへの旅行では、当地で流行していた複数の独奏楽器をもつ協奏曲のスタイルを、さっそく自作に取り入れている。《フルートとハーブのための協奏曲》もその一つで、パリの音楽愛好家でフルートを吹くド・ギーヌ公爵と、ハーブを弾くその令嬢のために作曲された。第1楽章「アレグロ（快速に）」は八長調の晴れやかな音楽で、2つの独奏楽器の対話も優雅である。

ピアノ協奏曲第21番八長調 K.467より第2楽章

1781年、宮廷音楽家の職を棄て、ウィーンで自由な活動を始めたモーツァルトは、生計を立てるためにコンサートをたびたび開き、ピアノ協奏曲などを披露した。1785年に初演された《ピアノ協奏曲第21番》もその一つである。単独でも演奏されることの多い第2楽章「アンダンテ（歩くような速さで）」は安らぎに満ちており、中間部はかすかにメランコリーを帯びる。

ピアノ協奏曲第20番二短調 K.466より第3楽章

第21番と同年に初演された《ピアノ協奏曲第20番》でモーツァルトは、ウィーン貴族たちが好んだ優雅さではなく、ドラマティックな表現を目指している。第3楽章「アレグロ・アッサイ（十分に速く）」では、ベートーヴェンの音楽を予感させるような激しい情熱が吹き荒れる。

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」K.527 より “お手をどうぞ”“シャンパンの歌”

1787年にプラハで初演された歌劇《ドン・ジョヴァンニ》は、ロレンツォ・ダ・ポンテの台本に基づくモーツァルトのオペラ3部作の2作目にあたる。女性の心を巧みに操るドン・ジョヴァンニだが、最後は地獄に落とされる。“お手をどうぞ”は、ドン・ジョヴァンニが村の花嫁ツェルリーナを誘惑するシーンの二重唱。“シャンパンの歌”は、「酒で頭がカーツとなるまで宴を盛り上げよう」とドン・ジョヴァンニが興奮して歌う早口のアリア。

歌劇「フィガロの結婚」K.492 より “恋とはどんなものかしら”

1786年にウィーンで初演された《フィガロの結婚》は、上記の「ダ・ポンテ3部作」の1作目。アルマヴィーヴァ伯爵の家来であるフィガロと恋人スザンナとの結婚をめぐる1日の騒動を描いた喜劇的なオペラである。どこを取っても生命力がみなぎるモーツァルトの音楽には、人間への温かいまなざしが感じられる。“恋とはどんなものかしら”は、思春期の小姓ケルビーニが、押さえられない恋心にとまどって歌う有名アリアである。

歌劇「魔笛」K.620 より “パパパの二重唱”

夜の女王から魔法の笛（魔笛）を渡され、鳥刺しパパゲーノとともに女王の娘パミーナを救うため、ザラストロの宮殿に出かける王子タミーノ。だが、悪役と思われたザラストロは立派な高僧だった…。モーツァルト晩年の歌劇《魔笛》は、こうした価値の反転が行われる謎めいたオペラだが、ドイツのメルヘンを題材としたハッピーエンドの歌芝居でもある。“パ、パ、パの二重唱”は、パパゲーノが伴侶となるパパゲーナを見つけ、二人で歌う陽気な二重唱である。

レクイエム 二短調 K.626 より“ラクリモーサ”

《魔笛》と同じくモーツァルト最後の年、1791年に作曲された未完のレクイエム（死者のためのミサ曲）で、弟子のジュスマイヤーらが補筆し、完成させた。灰色の服に身を包んだ男が曲の注文主を伏せた手紙を届け、作曲が開始されたというエピソードがある。モーツァルトが8小節で筆を絶った“ラクリモーサ（涙の日）”は、哀切きわまる、悲しみに満ちた音楽である。

モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス K.618」

モーツァルトが死の半年前、温泉で療養中の妻コンスタンツェの世話をしてくれた友人の合唱指揮者に送ったア・カペラ（無伴奏）の合唱曲である。タイトルは「めでたし、まことのお身体」の意で、澄みきった響きに、微妙な転調が細やかな陰影を与えている。

交響曲第 40 番ト短調 K.550 より第 1 楽章

モーツァルトの交響曲のなかで、短調は《第 25 番》と《第 40 番》しかなく、どちらもト短調なのは興味深い。ウィーン時代後半の 1788 年に完成された《第 40 番》は、作曲当初クラリネットが含まれていなかったが、後にモーツァルトはクラリネットを加えた。第 1 楽章は「ため息」の音型とよばれる 2 度下降音（ミ♭・レ）で開始される、哀愁を帯びた美しい音楽である。

交響曲第 41 番八長調 K.551「ジュピター」より第 4 楽章

《交響曲第 41 番》は、《第 40 番》と同年に書かれたモーツァルト最後の交響曲で、ギリシャ神話の最高神の名をとって「ジュピター」と呼ばれる傑作である。なかでも第 4 楽章は、「ド・レ・ファ・ミ」を基本とする主題が、フーガの手法によって楽器から楽器へと受け渡され、躍動感あふれる音楽を構築していく。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。